あなたの声で、授業が変わる。

香川大学では、各授業の改善のための資料として、また大学全体の教育改善の取組を検討するうえでの基礎資料として、学生の皆さんに授業評価アンケートをお願いしています。本アンケートでは、教員の授業への取組みや工夫、履修者の到達目標の達成度・授業の満足度についてお尋ねするほか、自由記述欄を設けて率直な意見をお聞きしています。
授業評価アンケートの結果は各授業の担当教員にフィードバックされ、担当教員は学生の皆さんの声を踏まえて授業の改善を行っています。以下に、その具体的な事例を紹介します。

これからの授業をより良いものにするために、授業評価アンケートに回答をお願いします。

「リラックスして発言できる」、「自分の意見を言いやすい」など、安心して受講できる環境が整っているとの声が多くある一方で、「入学直後に学びたかった」、「グループワークの時間が短い」、「スライドの指示がわかりにくい時がある」との意見も寄せられました。

これらの意見から、発言のしやすい心理的安全性の高いクラス運営へのニーズが強いと分析し、雰囲気づくりをさらに工夫するとともに、指示内容や時間配分の見直しを行いました。また、1名の教員が1年間で8クラスを2クラスずつ順次担当していた形式を、複数教員が同時並行で1Qに実施する形に変更し、全員が入学初期に受講できるよう改善しました。

結果として「早い段階で学べてよかった」、「クラスを通して話し合いのコツがつかめた」といった積極的な反応が見られ、改善の効果を実感しています。

今後も学生の意見を基に、担当教員全員で話し合い、学びの環境向上に向けた取り組みを続けていきます。

授業評価アンケートの結果、授業内容、内容理解、目標達成、満足度のいずれも全科目の平均点以下であり、「難易度が高い」「開講時期が早すぎる」等の問題点がありました。一方で、追加実施した上級生へのアンケートでは、「臨床診断の入り口として、極めて有効で不可欠な科目」という本授業へのニーズがあり、授業修了後にこのように感じる学生が多くいました。

この結果を、学生のニーズは高いものの、授業の難易度が高く、授業の目的を理解できないために満足度の低い学生が多く、事前に本授業の到達目標・意義（アウトカム）を十分に伝える必要があると分析し、以下のように授業を改善しました。

①目標を３つに明確化：「効果的なプレゼンテーションを行うことができる」「症候の発生メカニズム、疾患群、頻度、具体的症例について概略できる」「臨床修練の入り口として、鑑別診断の筋道について概略できる」。

②授業の約３ヶ月前に１コマを使用して、本授業の目標や意義を重視したオリエンテーション講義を行う。

③授業理解促進のため、毎回の小テスト（事後解説付き）を導入。

その後、独自に実施した授業直後のアンケートの結果（回収率 70%）では、76% が授業の目的が理解でき、68% が総合的に満足と回答しました。十分ではないものの明らかな改善が見られました。

学問への扉『越境する学問（イ）（ロ）』は、多様な学部やセンターの教員が担当している1Q 開講科目です。主に１年生の皆さんが受講するので、担当教員は授業での話し方、熱意、視聴覚教材の効果的な利活用など工夫を凝らしています。この授業を受講した皆さんは、学修の構えや姿勢を身につけることができ、これからの香川大学での学びの計画を立てることもできます。

これには、授業評価アンケート結果がとても重要です。授業実施期間に加えて、実施後の次年度のシラバスを作るときに担当教員が集まって、授業の実施方法、コメントシートや最終レポートなど、学生の学習を促すため授業設計の再検討やより良い改善への打ち合わせの機会を持つように意識的に取り組んでいます。

担当教員どうしで「手ごたえ」や今後の課題を整理する上では欠かせません。その結果は、授業評価アンケートの結果を踏まえ下図のとおり、担当教員によるビジュアルな全国ポスター発表も行っています。

授業評価アンケートを通じて、学生からは講義内容が分かりやすいとの評価が多く寄せられました。一方で、家庭学習に割く時間が不足しているという評価や、質問時間が足りないという改善要望も見られました。これらの評価を分析し、自由記述から共通の課題を抽出することで、具体的な改善点を明確にしました。

改善策として、家庭学習に必要な時間を確保するため、事後学習課題の内容を再検討し、学生が効率的に取り組めるよう、資料をより簡潔でわかりやすくしました。また、授業中に質問の時間を設け、学生が疑問を解消しやすい環境を整備しました。さらに、全 15 回の授業の中で、学生に学習指導案本時案を 3 本提出させる課題に取り組ませました。

これらの改善により、学生からは「家庭学習の時間が適切に調整された」、「教育実習前に学習指導案の作成経験を積むことができた」といった好意的な反応が得られ、授業改善の効果を感じました。

参考資料として配付した資料について、学生から「講義資料の通りに授業していない」「ノートと違う」等の指摘がありました。

これらの意見を説明時の「参考資料」と「講義ノート」の違いが伝わっていない・教員側の意図が正しく学生側に伝わっていないと分析し、次年度からは冒頭の説明で毎回「参考資料」の位置づけを具体的に説明する、板書との差別化を図るなど、伝え方を変えました。

理解の必要な部分のみを板書することで学生に要点を明確に示すことができ、学生からも理解が進んだコメントとそこからの疑問点が提示されるようになりました。

グローバル化した現代社会の諸問題を考察するうえで必要となる知識を獲得するためのオムニバス講義です。授業評価アンケートにおいて他項目よりもやや低い傾向にあった「アクティブ・ラーニングの促進度」に関わる部分の改善に取り組みました。

代表教員の提案のもと、各回の担当者は以下のことに取り組む時間を、可能な限り授業に組み込むこととしました。

まず、講義に関連する事柄を題材に受講生同士で議論すること。そして、受講生数名にマイクを渡して、議論したことや自分の意見を教室全体に発表することです。

受講生が非常に多い大講義かつオムニバス形式であるため、学生の反応を仔細に把握することは難しいものの、取り組みを実施した学期末の授業評価アンケートでは「アクティブ・ラーニングの促進度」は以前より上昇し、種別全体の評価と比べても高い数値となりました。

社会人学生で構成される夜間主コースでは、仕事を終えて 18 時から始まる 6 限の授業に間に合うように幸町キャンパスに移動することが難しい学生が一定数おり、コロナ禍で浸透したオンライン対応を求める声が上がっていました。

コロナ禍の後は従来型の対面方式に戻す授業もある中で、授業評価アンケートを通じて寄せられた社会人学生のニーズを教務委員会によるファカルティ・ディベロップメントの取り組みを通じて学部内で共有することにより、対面とオンラインを併用する授業や、オンデマンド動画の配信を活用する授業がコロナ禍以前に比べて増加しました。

その教育効果として、対面授業のみの時と比べて遅刻や欠席する学生が減少し、オンラインを通じて双方向のやりとりが増加するなど、仕事をしながら学ぶ社会人学生にとっては学修しやすい教育環境を提供することに繋がっています。

ファカルティ・ディベロップメント…大学の授業の内容及び方法の改善を図るための組織的な研修及び研究。

院生からは、時折、実習系の科目の授業評価において実習内容の改善を求める声が上がっていました。その声について、コース会議において何度か改善案について話し合いの機会を持ち、新たな実習内容を決定した。

改善前は、2 週間（10 日間）にわたる実習期間中、院生が自らの学校種に合わせて選択した 1 校の附属学校で実習を行っていました。具体的な実習内容としては、教育実習中の学部学生に対してメンター的役割として指導に当たるというものでした。

改善後は、実習期間中、６附属すべての学校種での実習を経験できるよう改めました。具体的な実習内容は、①６附属の副校長先生から学校経営についての講話を聴くとともに意見交換を行い、授業見学を行う（６日間）、②教育行政機関（県教育委員会、教育事務所、県教育センター、市町教育委員会）を訪問し、講話を聴くとともに意見交換を行う（２日間）、③選択制により各附属学校の研究会等に参加する（２日間）、により構成されることとなりました。

幼稚園（１園）、小学校（２校）、中学校（２校）、特別支援学校（１校）の６附属および各種の教育行政機関で実習を行うことは、院生にとっては教職大学院でなければ得られない貴重な経験であるため、満足度は全般的に高いものとなっています。

5 名の教員によるオムニバス授業です。毎年、担当教員が集まって授業検討会を開き、次年度の授業内容を決めています。授業評価アンケート、ならび、授業時に実施している「受講者アンケート」は、授業検討会で結果を確認しています。授業評価アンケートでは、グループワークをもっと増やしてほしいという意見が複数から寄せられていました。そのため、今年度の授業では昨年度よりもグループワークの回数を多くしました。

今年度の授業評価アンケートでは、グループワークが勉強になった、という感想が寄せられました。授業評価アンケートの記述は、コロナ禍で少なくなっていたグループワークを復活させるいいきっかけになったと思います。加えて、授業時に実施している「受講者アンケート」では、科目の目的が達成できているか検証するため、受講生の意識を聞いています。

今年度は、「文理融合型科目」に　ついてお聞きし、その結果は、『香川大学教育研究』第 22 号に 掲載される予定です。

このように、皆さんが回答してくださったアンケート調査の結果 は、授業改善に役立っていますの で、ぜひ引き続きご協力をお願いします。